

逆ポーランド記法というものがある。コンパイラの本には必ず登場するが、これがJ. Lukasiewiczというポーランドの論理学者の発明に基づくことには、触れていないことが多い。

ハンガリアン・メソッドという手法がある。2部グラフのマッチングをとる方法で、これもORやグラフ理論の教科書には不可欠である。H. W. Kuhnによる論文 "The Hungarian method for assignment problem" が起源だが、この命名がハンガリーの著名な数学者 Egervary に由来することを記憶している人も多くはない。

東欧に民主化革命が連鎖的に起こったことは、記憶に新しい。その東欧には計算機科学の分野でも優れた業績があるのだ、ということをお願いしたいわけではない。問題にしたいのは、個人名を使わずポーランドとかハンガリーという国の名前で呼んでいる言い方そのものである。考えてみればずいぶん失礼な言い方ではないか？

これは明らかに、米国を中心とする計算機科学の研究社会からみて、辺境の地で発生した理論や方法であるという感覚を示すものであろう。「ほら、あの東欧のどっかの何とかいう奴が考えた、あの方法さ」という感じなのではないか。もちろん米国では、ポーランドやハンガリー出身の科学者、政治家などが数多く活躍している。しかし、それらはやはり“米国人”なのである。国としての東欧諸国は、少なくともこれまでは遠かったし、そこに住む人の仕事を論文などで知っても、顔は見えなかったということだろう。

経済大国日本もまた、個人の顔が見えないと言われる。これはそう言う側の狭量さや努力の不足による面もあるだろうし、それを単純に伝えるジャーナリズムの問題もあるかも知れない。しかし、国際的な交流の必要性がかねてから高く、その機会もますます増えているコンピュータ産業や研究の分野でも、この指摘をあながちに否定できない。実際、学会や経済交流の場で、個人としての能力と魅力をアピールし、また認められている日本人の数は、あまり多いとはいえないだろう。

同時に、品質の高さ、機能性、価格などの優秀さによって、その“顔”を国際的に十分に認められている日本の製品群との大きな落差が、印象を強めてもいるはずである。家電製品や自動車の実績からの類推からか、ハードウェアだけでなくソフトウェアまでも、日本の生産性と品質の高さが産業として脅威だと、実際以上に思いこまれているところもある。ソフトウェアに携わっている身にはくすぐったい気もするが、その裏には脅威論を煽っているような節もあり、冷静な議論をあやうくする危険も感じる。

お互いにバランスのとれた認識をもち議論をしていくためには、やはり個人レベルでの交流に努力し、顔を認めさせることだろう。しかしそれより前に、ジャパニーズ記法でもジャパニーズ手法でもいいから、工業製品以外でも世界的に認められる成果を出す方が先か？